

平成15年度志摩町歴史資料館秋季特別展

# 浦の風景

—海と共に生きた証—



志摩町歴史資料館

## 開催にあたって

玄界灘に突き出て、西に引津湾・加布里湾、東に今津湾・博多湾を擁する糸島半島では、縄文時代より現在にいたるまで、常に海と向かい合い、海とともに発展してきました。玄界灘沿岸部での漁撈活動の痕跡は縄文時代前期にさかのぼり、以後長い間、漁撈を通して玄界灘を航海するための力が養われました。その力が基盤となり、後の日本の文化の形成に大いに貢献したとも言えます。

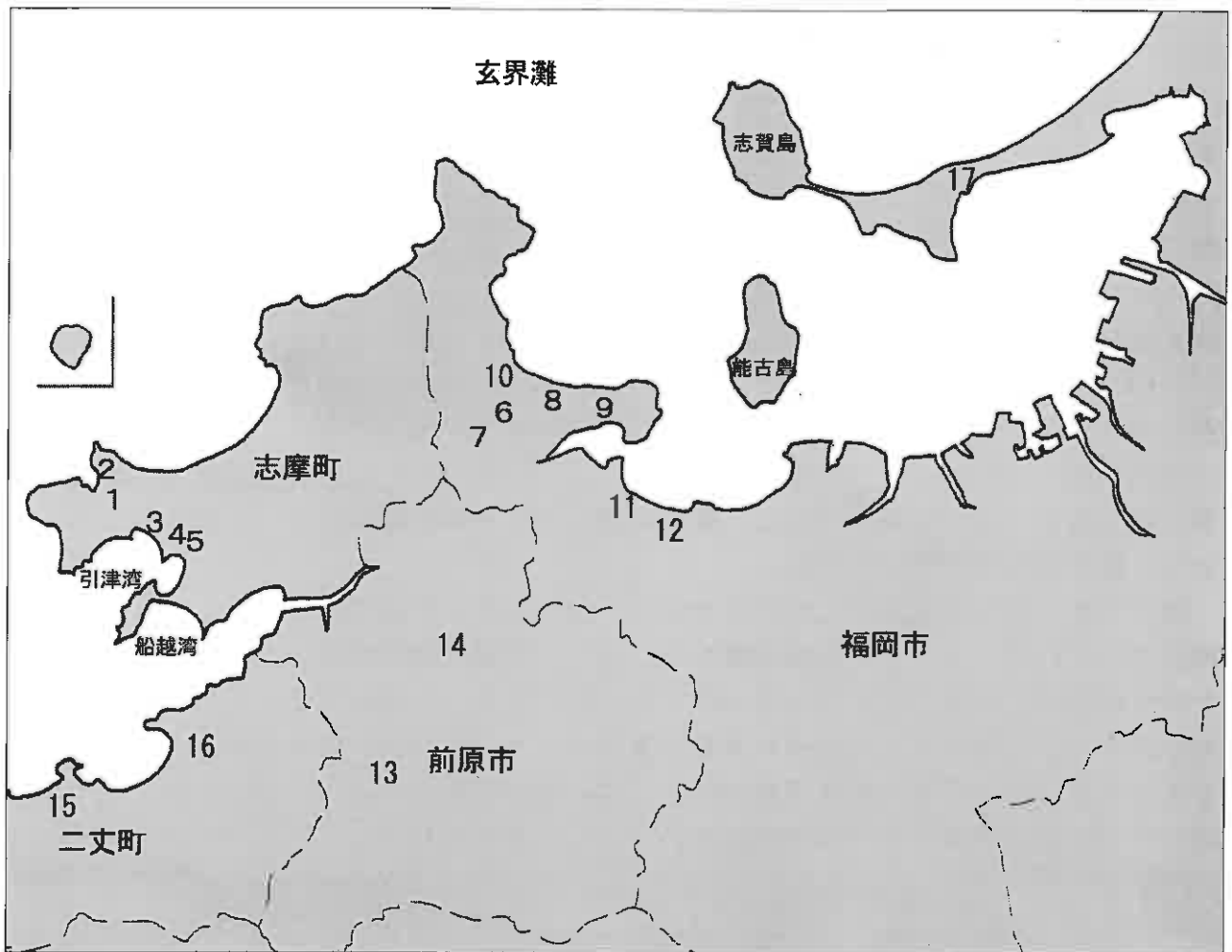
今回は、沿岸部に暮らす人々が、海にどのような恵みを求め、どのような活動をしてきたのか。志摩町内に残る資料と旧糸島地域である福岡市西区の資料、さらに8～9世紀頃の様子が明らかとなった海の中道遺跡出土資料を参考にして探ってみました。この機会に、玄界灘に生きた人々の残した文化を感じ、今後の文化財保護にご理解・ご協力いただければ幸いです。

最後に、この特別展を開催するにあたり、ご指導・ご協力賜りました関係各位に、厚く御礼申し上げます。

平成15年10月21日  
志摩町歴史資料館



製塩の風景（志摩町・綿津見神社蔵）



## 2. 今回の展示に関わる遺跡位置図

- |                                    |                                    |
|------------------------------------|------------------------------------|
| 1・天神山貝塚                            | 2・久保地古墳                            |
| 3・岐志元村遺跡<br><small>きしもとむら</small>  |                                    |
| 4・新町遺跡（支石墓群）・新町貝塚                  |                                    |
| 5・御床松原遺跡<br><small>みとこまつばら</small> | 6・桑原飛櫛貝塚<br><small>くわばるひぐし</small> |
| 7・元岡瓜尾貝塚<br><small>もとおかうりお</small> | 8・長浜貝塚                             |
| 9・今津貝塚                             | 10・小葎遺跡<br><small>こもぐら</small>     |
| 11・今山遺跡                            | 12・今宿遺跡                            |
| 13・長野宮ノ前遺跡                         | 14・上罐子遺跡<br><small>じょうかんす</small>  |
| 15・才良木遺跡                           | 16・木船・三本松遺跡                        |
| 17・海の中道遺跡                          |                                    |

# 漁のはじまり

人間が海に食を求める行動は、きっと動物から進化する過程で発展してきたのだろう。玄界灘沿岸部における漁撈活動は縄文時代前期にまでさかのぼり、志摩町には、そのことを示す遺跡として天神山貝塚・岐志元村遺跡・新町貝塚が、東側の福岡市西区には、桑原飛櫛貝塚・元岡瓜尾貝塚・長浜貝塚・今津貝塚があり、多種の貝・魚骨とともに釣針・銚・ヤスなどの漁撈具が出土している。また縄文土器の中には、底部に鯨の脊椎の痕跡があるものがあり、この頃には鯨のような大型哺乳類を捕獲していたであろうことがうかがえる。その漁法は明確ではないが、土器底部に残る編み紐の痕から、すでに現在の網につながるものが使用されていたことも推測できる。

『魏志倭人伝』には、3世紀頃の倭人について、男は大人も子供も「鯨面文身」、つまり顔や体に入墨して魔除けとし、海中に潜って魚や蛤はまぐりを捕らえていた様子が記されていて、海士の存在がうかがえる。

海から得た恵みは食料としてだけでなく、時には加工されて新たな物に生まれ変わり利用されている。まだ金属器が出現していなかった縄文時代において、貝や獣骨は加工しやすい身近な材料としてうってつけであったのだろう。新町貝塚からは貝製の腕輪を左右合わせて21個装着した女性の人骨が見つかったほか、他の貝塚からも腕輪をはじめとするアクセサリーや漁撈具が出土している。それらひとつひとつには、人々の海の恵みへの感謝の気持ちが込められているように感じられる。



貝殻で器面調整した土器



鯨椎骨の台上で作られた土器



編み紐の痕が残る土器



ブレスレット



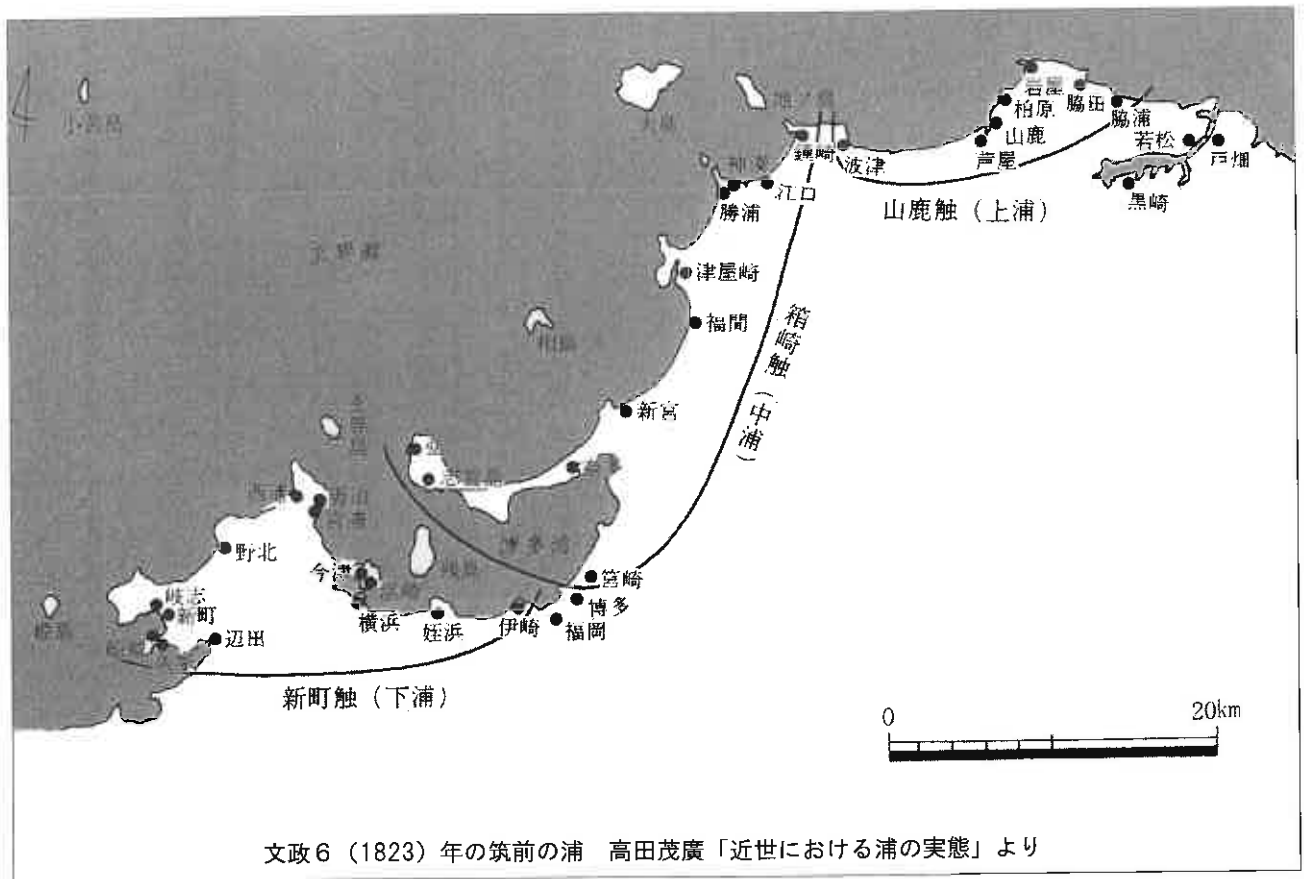
筭(かんざし)



ネックレス



貝面



## 近世の浦

海に生活の基盤を持つ集落は、近世には農村を意味する「岡」に対して「浦」と呼ばれた。浦の大半は町奉行・郡奉行ではなく、浦奉行一浦大庄屋一浦庄屋の支配下にあり、筑前では浦を二分して東は上浦、西は下浦とされた。いつの頃からか大庄屋の支配は三つに分かれ、大庄屋の居住地の名をとって「〇〇<sup>ふれ</sup>触」と呼ばれた。

浦の職業は漁業の他、海運業や商業、製塩業など、それぞれの浦で性格を異にしていたが、玄界灘という国境の海を前面に持つ福岡藩領内の浦は、鎖国期においても長崎警備のほか、異国船や朝鮮漁船の接近などの軍事的・外交的な緊急時には、水夫として動員される宿命を背負っており、志摩郡の浦々も例外ではなかった。寛政17 (1640) 年に姫島、正保2 (1645) 年には芥屋に、海上の見張り役である遠見番所が設置されたのも、こうした緊急時に備えるためであった。そのような状況下でも、享保3 (1718) 年には岐志にジャカルタ商船が迷い込み、また幕末の慶應3 (1867) 年には姫島にイギリス人が乗った小型蒸気船が洲に乗り上げるという出来事があり、浦は対応に追われたようである。



志摩町歴史資料館